

右肩上がりの真っ最中だったので、右肩上がりで先を見ろと言っても、見られなかったですね。何しろ山を登っている最中で頂点に行っていないので、先を見ろと言っても、見られるわけがない。変に休んでしまうと転がり落ちてしまいそうな気がしましてね。とにかく夢中になって登って行かなければいけなかった。それで、やっと今頂点にきて、初めて、過去も先も見られるというのは、何故先が見られるかという頂点にいるからだというたとえで、非常に先が見える時代になってきなと。問題はその先を見ようとするか見ようしないかと、畑村先生がおっしゃるように隠れてしまって、見えるけれども、横にいつ見られるけれども、見たくないという状況もあります。僕たちは過去も未来もちょうど見られる時期に来たので、過去に何が起きたか、将来に何が起きていくかという事を徹底的に列挙して、それについてはこうしよう、これについては出来ないからギブアップしようという事を今、みんながやる時ではないかなと思います。

**【小出】** 非常におもしろい話だと思います。徳川時代の話が先ほど出ましたが、人口3000万人くらい。時々政治の問題で、ずっと日本人は平和ボケだと言われていました。こんなものでは駄目だと言われているけれども、江戸時代は300年平和ボケだったわけですよ。300年ボケでいても幕末維新になったら、急にぴりっとしまるわけです。だから、僕はたった60年くらいでボーとしているくらい、まだ足りないくらいではないかという感じがするのですが。だから、もっと長いスパンで物事を考えるというのが、ひとつの歴史なわけ。それから頂点という説ですが、僕も本当にそんな感じがします。今頂点で、それで平家物語の昔からも盛者必衰の理があるわけですから。頂点でこれから下がるわけですけれども、このポイントは下がる角度だと思うのです。急に下がるとえらい事になるわけですが、ゆるやかに下がっている間は、対応策が必ずできますから、特にこういう災害の問題とか安全の問題というのは、下り坂といっても考える時間が常に与えられていますね。少子化でもそうですが、ずっとゆるやかで、鋭角か鈍角かが最大の問題で、鈍角の問題ばかりだと思うのです。だから、鈍角を利用して、この時間をどういうふう

に対応策というものを考えるかというのが、いちばんいいのではないかと思うのですけれども。どうでしょうか、竹村先生。

**【竹村】** 僕はもうちょっと違う視点を持っていて、上がる下がるの話とはもうちょっと違う事を強く思っています。それは、日本中はこの50年間、もしかすると、100年間かもしれないけれども、みんなが同じ向きに向いて、同じ考え方をするのが一番正しいし、良いのだと何かで決めてしまっていて、一人ずつが自分で考えて、自分で判断するのが一番元になって、その上でみんなと一緒に動く向きをちゃんと動こうよという、一番当たり前の個の独立というのを忘れてしまっているのではないかという気がするのです。ですから、その安全にせよ、安心にせよ、一番基本は自分なりにちゃんと自分で考えると。そして、ここまでは、自分はこういうふうにも備えるぞ、ここからは先は備える事ができないからやらないとか、構えないでもいいけれど、どこまで、自分は何かを想定したり考えたりしたかという事をきちんと自分で意識しないで、そこは誰かが何かをやってくれるとか、みんなでやれば何とかなるのよとかいう、思考停止になっている部分を、早く思考を開始にした方がいいのではないかと感じるのです。ですから、個の独立と、集団で共有という事をきちんと意識して、一人ずつがちゃんと自分で考え始めるというのをやらない限り、本当の安心は出てこないのではないかと、不安ばかりが出てきて、ちょっと何かそれを外からかき立てられると、すぐに不安になってしまうというのは、一人ずつが考えていないからではないかという感じがします。

